

リスペクト アザース

～いじめをなくすには、人への敬意をもつこと～

「リスペクト アザース」

私がこの言葉に初めて出会ったのは、人権作文コンクールの全国表彰者の作品集です。

それは、神奈川県のある中学生の作品でした。

その中学生の両親は日本人ですが、本人はアメリカで生まれ、10歳半まで地元の保育園・幼稚園、小学校に通ったそうです。「リスペクト アザース」という言葉は、その時に出会った先生たちが何度も口にしていた言葉だそうです。

そこは、多人種の子供たちが一緒に学ぶ土地で、小さい時から自分が周りとは違うことは当たり前前の生活だったようです。集団生活の中では、当然人間関係のトラブルが生じるのですが、そのたびに先生たちは必ず「リスペクト アザース」と言い、当事者に反省を促したそうです。「相手をリスペクトしなさい」とは「相手に対する敬意を持ちなさい」ということであり、その意味も分からない幼少期からその言葉を叩き込まれたそうです。

これは、「意地悪しないで、みんなで仲良くしなさい」とか、「いじめはダメ」という、その時の行動を注意するのではなく、その行動を起こしてしまった根本の考え方を問題にしていることになる、とこの中学生は言っています。

心に刺さる鋭い指摘だと思います。

また、これは先生だけでなく、野球のリトルリーグの監督やコーチからも言われた言葉だそうです。あまり上手くない選手がエラーして、チーム全体が「おい、このへたくそ」と怒鳴りたくなるような場面でも、監督やコーチは「リスペクト アザース」

と言って、「当人の気持ちを分かってやりなさい」という指導をしたといます。当時初心者だった彼も、この言葉を聞いて救われる気持ちになり、もっと上手くなるようにうんと頑張り、シーズン最後にはチームに貢献できるようになったと書いています。

実は、この作品の佳境はここからなのです。

その後、日本の小学校に通い始めた彼は、生活にはすぐに慣れたものの、同時に大きなカルチャーショックを受けたそうです。一番驚いたことは、みんなが他の人と大きく違わないように、なるべく同じようになるように非常に気を使っているように見えたことです。そう感じた彼でしたが、そのノリがわからず、今まで通り自分がうまくできたことを周りの人にも伝えていたら、「それは自慢だ」と言われて、なんとも悲しい気持ちになったといます。

さらに、相手の気持ちになれば絶対に言えないような侮辱するようなひどい言葉を言い合っている、「冗談」といってうやむやにしていることもあり、彼が叩き込まれた「リスペクト アザース」の世界はここにはなかった、と断言しています。

ひどい差別の歴史をもっているアメリカではその過ちを繰り返さないように、子どもたちに叩き込んだり、大人自身も戒めているかもしれないと彼は考えています。

だからこそ、日本でももっと「リスペクト アザース」が浸透していけばいいと思う、と訴えています。日本は表面上差別のない社会なので、必要ないと思われるかもしれないが、これこそが人権を考えるうえでの基本だと言っています。

同じ人間は一人もいない。人と違うことがまたその人の個性である。違う点だけでなく、うまくいったこと、できなくても努力していくことなど

を尊重しあっていくことができれば、もっと素晴らしい社会になっていくと思うと締めくくっています。

私は、この作品を読んで衝撃を受けました。彼の経験や考え方に感心するとともに、今、日本の学校現場が置かれている状況についても考えさせられました。

日本では、現在でもいじめの認知件数が増加しています。同時に、不登校の数も増加しています。何が原因かを突き止めることは容易なことではありません。社会全体の問題かもしれません。

ただ、いじめを少なくしていく、なくしていく教育は、まだまだ工夫すればできるのではないのでしょうか。そのヒントを、この中学生の作文からもらったような気がしたのです。

私たちは、幼稚園や保育園、小学校低学年から、「相手に敬意をもちなさい」という教育を意識しているのでしょうか。たしかに、何か事案が起きた時、あるいは道徳などの時間にそういう指導はするでしょう。しかし、この中学生がいうように、起きてしまった事象に対して、それはいけないという注意が多いのではないのでしょうか。

そうではなく、根本的な人としての心の在り方、つまり、相手を尊重し、相手を敬う心を持つという指導を一貫してしていく必要があるのではないのでしょうか。それは、決められた場面で行うというのではなく、小さい時から常にそれを意識させていく指導が必要ではないのでしょうか。

日本でも「おもいやり」の心を持つことはよく言われますが、なんとなく「優しくしてあげようね」的なニュアンスも感じます。もっと強く意図的に、相手を尊重する、つまり相手に敬意をもつ心を育てていくことがとても大切ではないかと思います。

日本では、文科省がいじめられる側の立場に立ってたいじめの定義をしていますが、いじめる側の定義はしていません。

いじめとは、集団で行うからとか、好き嫌いの問題とは違います。いじめとは、相手の人格を尊重しない態度、人格をないがしろにする行為です。相手がいやがっていることを承知で行う、あるいは相手が嫌がっているという気持ちをわかろうとしない、これがいじめる側の心理のもとだと思います。

小さい時から一貫して「相手への敬意をもつ教育」を徹底していくことが、私はいじめを減らす一番の方法だと思っています。それは、いかなる時でもできる指導です。朝の会、授業中、行事、清掃活動、部活動、何気ない日常の会話等々、あらゆる場面、あらゆる機会を通じて、「相手のがんばりを認めましょう」「相手のすごいところを学びましょう」「相手の失敗を追求するのではなく、励ましましょう」などなど。

「リスペクト アザース」この言葉を胸に刻んで、相手に敬意をもち、尊重し、みんなで違いを認め合うことで、人間関係で悲しい思いをする子どもをなくしていけたらいいなと思います。その結果として、みんなが楽しい学校になればいいなと思っています。

(市川三郷町教育長 渡井 渡)



みんな違ってみんないい!